

日本学術会議
フューチャー・アースの推進に関する委員会（第11回）
議事要旨

1. 日時： 平成29年1月19日（木）14:00～16:00

2. 会場： 日本学術会議 2階 大会議室

3. 出席状況

出席者：安成委員長、杉原副委員長、江守幹事、遠藤委員、西條委員（V-CUBE）、武内委員、大西委員、花木委員、氷見山委員、三枝委員、中島委員、山本委員、植松委員（V-CUBE）、大手委員、谷口委員（15名）

欠席者：蟹江幹事、巖佐委員、向井委員、中村委員、植田委員、沖委員、春日委員、小林委員、中静委員、春山委員、毛利委員、安岡委員、山形委員、河野委員、福士委員、村山委員（17名）

オブザーバー：NPO法人 国際環境経済研究所 長谷川主席研究員、京都大学長谷川研究員、東北大学石井准教授、文部科学省環境エネルギー課森氏

事務局：石井参事官、松宮補佐、濱尾補佐、漆畑上席学術調査員、大橋専門職付、駒木専門職付

4. 配布資料：

資料1：フューチャー・アースの推進に関する委員会（第23期第10回）

議事要旨（案）

資料2：Future Earth 関係 国内・国際会議（2017年1～3月）

資料3：第1回 フューチャーアース&超学際科学（トランスディシプリナリティ）研究会（仮称）

資料4：5th Workshop on Future Earth in Asia

資料5：第8回地球研東京セミナー

資料6：JST.RISTEX. 成果報告会

資料7：International symposium “Decision Science for Future Earth”

資料8：FE国内暫定関与委員会報告

資料9：Future Earthアジア地域センターの活動報告（2016年4月～12月）

参考1：委員名簿

当日資料等：Future Earthの国際動向

日本における戦略的研究アジェンダの策定について

わたしたちがえがく地球の未来

Future Earth in Asia -Development and Implementation Strategy

議 事：

1) 前回議事要旨(案)の確認

資料1に基づいて、前回議事要旨(案)が確認され、了承された。

2) FEの国際動向

【FEの国際動向に関する説明】

・安成委員長より、資料「Future Earthの国際動向」に基づき、FEの国際動向の主な論点について説明があった。

【FE の国内・国際会議】

・次に安成委員長より、資料2「Future Earth 関係 国内・国際会議（2017年1～3月）」に基づき、説明があった。

〔意見交換〕

・FE教育人材育成分科会では、まず前期の提言のフォローアップをした。その中で新しい提言についても議論したが、やはりフォローアップする方に注力しようということになり、夏くらいを目途に学術フォーラムを実施しようという話になった。そのためのワークショップを来週の月曜に行うので、できるだけ多くの方に参加いただきたい。高校生などにも来ていただきたい。

・それから、1月26日（木）に地球研が年に1回、東京でセミナーを開催するが、今年は東大で行うことになった。これは、東大大学院のリーディング・プログラムとの共催で、特に「人新世時代（Anthropocene）」における研究のあり方について議論するもので、ぜひご参加いただきたい。それから、その翌日に日学で「持続可能な開発目標（SDGs）の達成に向けた超学際研究とマルチステークホルダー協働の推進」と題した国際会議を開催する。

→環境学委員会が最終的な管轄だが、FEについては様々な議論が進んでいるのに対し、SDGsはそれと追加になるような政策展開についてあまり議論してこなかった。そこで提案したところが、国際会議の毎年の枠組みの2つのうちのひとつとして位置付けてもらった。ひとつは、SDGsとFEを関連付けて考えていくこと、もうひとつは、Co-DesignとCo-Productionのキーとなる「マルチ・ステークホルダー」。後者については、何が「マルチ・ステークホルダー」なのかという問題意識もあり、今回は、国連で政策決定に関わった方とか、民間事業、特に海外でSDGsを企業の戦略に入れている方とか、パネリストの中には若いNGOの方にも入ってもらおう。そういうことでやりたい。お陰様で、参加者の定員は超えており、受け付けは締め切っている。もし参加されたいときは相談されたい。その結果については何らかの形で（発表する）。提言まで行くかはわからないが。

→資料6にあるように、2月4日、JST/RISTEX JSRA事業の報告会が京都・岡崎の国際会館で開かれる。

→これに関しては3つある。2015年からJST-RISTEXフューチャー・アース構想の推進事業を進めているが、グローバルレベルのSRAは2014年に実施されたが、その中でステークホルダーの関与がそれほどでもなかったという反省を踏まえ、日本のSRA（J-SRA）を構築するという形をとることにした。その最終報告会が2月4日ということだが、最終的にここにあがっている10のテーマと107の優先課題が選ばれた。それプラス、江守さんがいわれているFEを見直すことを入れて全体で108になる。具体的には、現在一般用のパンフレットを送っており、一般市民の方々から実際に投げかけられた疑問や課題を、行政や産業界、我々のような専門家が聞き、そういう課題の候補、シーズラボの研究課題に直していくという作業を、委員会の多くの方の協力をいただいて昨年1月に行った。選んだ課題の優先順位づけ、日本の強みの評価などを行った上で、2月4日の最終報告会で報告する。ここにあがった10のテーマだが、グローバルのSRAと異なるところは、「地域社会」、「文化」があがっている点。2月4日のシンポジウムには、科学未来館の毛利館長においていただくほか、会場の一般市民の方にもその優先順位づけをしてもらおうと思う。「気候変動」と「リテラシー」の2つに絞ろうと思うが、市民の方が考える優先順位と我々専門家が考える優先順位と何が異なるのか、パネルディスカッションで議論したい。10のテーマについては、委員を含めて1月のワークショップに参加していただいた方を中心に発表をお願いする。パネルディスカッションでは、毛利館長をはじめご専門の観点からディスカッションしていただく。

→それから、2月18日・19日、九州大学で「決断科学」に関する国際会議（Decision Science for Future Earth）が開催される。2月25日には、イオン環境財団及び東京大学国際高等研究所の主催で、「（第1回）イオン未来の地球フォーラム」が開催される。

→「イオン未来の地球フォーラム」は、FE事務局の活動をイオン環境財団にご支援いただけないかとお願ひしたが、現在のイオンは業績が芳しくなく、最終的にはシンポジウムを開催する形で協力したいということで実現したもの。多分5年程度は毎年（資金を）出してもらえらると思うが、FEに関するテーマで毎年変えて開催する。今年は「地球と人の健康」というテーマとした。東京大学大気海洋研究所の高藪教授、海洋研究開発機構（JAMSTEC）の白山理事、シドニー大学公衆衛

生大学院（プラネタリーヘルス研究室）のアンソニー・ケイボン教授らにご講演いただく。ケイボン先生は、FE との関係も深い方である。当日は入学試験日で本郷キャンパスではなく、同大武田ホールで開催することになっている。

3) FE の国内体制について

- ・次に、江守幹事より、資料8「FE 国内暫定関与委員会報告」に基づき説明があった。

〔質疑応答〕

・実質的には、江守先生の問題意識で進めていただきたい。とりあえず、ピックアップされた方々に集まっていたいただいたが、第1回目（の会合の内容）は概念的なものにとどまり、時間もなくディスカッションも不十分だった。概念をいかに理解してもらうかという扱い方については谷口先生、JSTの津田先生にもおいでいただき、具体的なステークホルダーの関与について共有する仕組みにしている。

→この委員会には、（FE国内暫定関与委員会の）メンバーが2人いるので、色々な形で連携して進めたい。

4) FEの今後の研究推進と予算措置へ向けた方策

【FEの今後の研究課題】

- ・続いて、安成委員長より、資料9「Future Earthアジア地域センターの活動報告」に基づいて説明があった。

〔質疑応答〕

・議題4について、今後日本でFE関連の研究を、ファンディングを含めてどのように進めていけばよいか。これについて様々な議論があるが、例えば以前の委員会の時に紹介したように、ファンディングに関して例のマスタープランに私が代表として提示したのがひとつ、あと、三枝先生がカーボンプロジェクトを中心としたものを出したFE関連案件、生態学のモニタリングネットワークという形で出した案件、の計3つをマスタープランに出している。まだ正式の選定結果は来っていないが、私の出したプランは、狙いはいいが内容がオーバーオールなので具体的にどうするのかは難しいのではないかとコメントがあったように、FEは重要なテーマであるにもかかわらず重点課題には採択されない可能性がある。感触としては、FEは重要なテーマだが、全体的にマスタープランになるのかという評価がある。文科省として、これまで重点課題として取り上げたものに対しファンディングを考えるとというスキームだが、先日（文科省）学術機関課長が大学共同利用機関の機関長会合に来ていた際、マスタープランをどのように使うかについては、これまで重点課題としてファンディングを考えたが、必ずしもそれに拘る必要はないのではないかと。少なくともヒアリングまで行ったプロジェクトについては、例えば政策課題等を考慮して考えるべきとコメントしていた。今後は、必ずしも重点課題というだけでファンディングの対象にならない可能性もあるかなと期待したい。ヒアリングには行ったので、こちらもテーマをある程度絞って、進めていくしかない。マスタープランの方針とも関係するが。ただ、これから議論になるが、FEの研究はCo-Design、Co-Production、まさに超学際的な色彩が濃く、これまでの評価システムには馴染まないということが常につきまとう。しかしそれは、今後広い意味での研究はどうあるべきかという部分で、評価体制そのものもFEのような活動を通して変わってくるべきであろう。その意味でこの分野の活動は、ファンディングは難しくても引き続きやる必要があると思う。

5) FE推進に向けたオープンな勉強会（仮称）について

- ・次に、オブザーバーで東京大学のグローバルハブ・メンバー（FE国際事務局コミュニケーション担当）の長谷川麻子氏から、資料「FE研究プロジェクトのあり方について～グローバルハブの立場から～」に基づき、FE研究の動向について説明があった。

〔質疑応答〕

【FEとベルモントフォーラム】

・FEのアカデミーの広い意味での連携では、発信そのもの、まさにCo-Designなので、研究者以外の方が提案する、それに研究者が協力するという形も今後活発化する必要がある。

→素朴な質問だが、文科省では、FEはどの程度の頻度で（話題に）出るのか。どういう文脈で出るのか。

→ほぼ毎日出る。ほとんど予算に関わるのでどうしようもないと思う。それほど表だって議論していないが、SDGsとFE、ベルモントフォーラムとFEをどのように組み合わせていったらいいのかといった文脈が多い。

→FEの国際アライアンスとしてベルモントフォーラムは入っており、このフォーラムは今具体的にファンディングをテーマごとにしている。FEの理念とベルモントフォーラムの理念があるとしたら、むしろ当初は、FEの具体的なファンディングのひとつとしてベルモントフォーラムがあるといった理解が多くの方にあった。今の議論はどうか。

→FEとベルモントフォーラムの関係を提示するのは、まだ難しいと思っているように感じている。あとは日本にあるFE拠点として、国際機関的なファンディング機会をどのように実際に利用していくかという戦略を一生懸命考えているという感じだ。

・FE委員会の発足当時は、当時阪大の小林先生に来ていただいて、科学コミュニケーションに関する機能が重要だという認識があったのだが、今のところその核となるようなものはなく、いつてみれば内部のコミュニケーションもできていないような状況なので、そういうことを専門の研究者ひとりひとりをインボルブするような方法がないとダメなのではと常に考えていた。それについて実際に色々な方と話したいと思うのだが。

→今度のエンゲージ委員会でサイエンス・コミュニケーションを含めて考えておられる方の意見を。

→その問題は私も共有している。今回の暫定エンゲージメントに関連して申し上げますと、現在のメンバーの中では科学未来館の池辺氏に環境の教育的コミュニケーション分野に近い方として入っていただいている。あと、文系・理系をつなぐという話があるが、明治大学の松浦氏に立上発起人の時点からお手伝いいただいております、今回も暫定委員会のメンバーに入っていただき、人文社会科学的な視点からのアドバイスを受けている。

→「グローバルハブ」の日本事務局ということだが、しかし「日本ハブ」ということで、立場的に本来グローバルなところでの世界で起きたことを取り扱うのと、やはり日本にあるのだから日本のことを取り扱うということと、その辺のすみ分けというのはどうなっているのか。

→まさに自身が最も悩んでいる部分はそこで、国際事務局の日本ハブというのは何が最も重要な仕事なのかというのは非常に難しい。事務局長の春日先生はそれがおありでそれを果たしておられるが、事務局チームとしてはそれが目標で、どのようにやっていくかというについて悩んでいる。自身もそれを長く悩んでおり、年明けの地球研との合同セミナーにうかがい、その後2月のフォーラムのメディア取材をどう受けるかという問題に突き当たり、それを考え始め、安成先生に相談したくてメールを差し上げた。その結果が本日のプレゼンにつながった。まさに先生がおっしゃったところが自身の悩みであり、何を優先すればよいか正直わからない。しかし、日本国が支えてくれなければ困る。やはり日本国内で足場を固めることが最優先なのかとも思う。逆に国際事務局はこれをやるべきではないかというのがあれば、教えていただきたい。

→国際ハブは5つの機能がある。東京のハブの機能のひとつは、グローバルな意味でのコミュニケーションだが、国内ではまだFEはあまり認知されていない。FEはすごいテーマだが、具体的には何をやるのかという時によくわからない。そこは、ひとつは研究者以外の人々とどうコミュニケーションして問題を共有するかというのが非常に重要で、それがFEでは研究の枠組みを作る非常に重要な作業となる。

【ESDへの取組み】

・お話の中ではESDについて触れられてなかった。文科省ではそれをどの程度本気でやろうとしているのか。

→環境エネルギー課はESDの担当ではないのか。

→ESDは、ユネスコ委員会の関連部署で担当している。

→自身もパートナーとして、文科省の方にも来ていただきたいと思っている。

→FEがぶち当たっている壁は、いわゆる縦割りの壁。文科省の中でも、FEそのものは環境エネルギー課だが、ESDは旧文部省系のユネスコ担当。本当に交流がない。FEのようなテーマに携わっていると、この後の研究会でも出てくるが、エネルギー、食糧、水、連関の問題は、現実には省庁でいうと全く異なるところが担当している（農水、経産、国交省）。やりがいはあるが、そういう問題と常に向き合いながらFEは進めていく必要がある。

→昨日のデータのワークショップでも、文科省系の方が多く、国交省系の方は来なかった。コミュニティは違う。あとひとつ付け加えると、ベルmontフォーラムについて、昨年11月に会議があった。その際、「ベルmontフォーラムとFEとの関係について」というセッションがあった。その際は最終結論が出ず、改めて公式の文書を作るという結論が出た。ドラフトは自身の手元にはないが、もしそれが出たら皆さんと共有したい。

→ベルmontフォーラムでは、TD研究が最も重要ということで議論してきたはずである。このフォーラムでは、自身が聞いた感じでは、その前に「インターディシプリン（学際）」じゃないか、「トランスディシプリン（横断型の学術体系化）」はその後ではないかという見解らしい。現にベルmontフォーラムで最近気候変動のプロジェクトのアナウンスメントがあったが、やはりベースはインターディシプリンであって、それを社会にいかに関用するかについてはTD研究もあるわけだが、なかなかそのプロセスには至っていない。

【ソサイエティ 5.0 について】

・今のお話の中で、「ソサイエティ 5.0」のところが、FE ではあまり聞かない言葉で新鮮な感じがした。なぜFEかという話を聞く時、プラネタリーバウンダリーの話から入る。それ以外のことも色々とおっしゃっているわけだが、やはり現状が問題だからというところから入って、そこが全体を束ねる認識になっている。そうすると、問題を解決する、マイナスを何とかするという発想で束ねられた感じがしていた。「ソサイエティ 5.0」の良し悪しはわからないが、将来の新しい社会を作っていく、色々な技術から何から、IOP が入り AI が入って色々変わると現在の社会とは違う社会になる、産業構造から何から今とは違ってしまうということだと思う。今の問題を解決するというより、将来様々なことが起こるだろうからそれに向かって新しい社会を思い描いて行こうという未来志向のことが、FE の議論では思ったより語られていなかったように思う。

→「ソサイエティ 5.0」の情報はいまだ知らない。多分、将来どのような社会を作るのかということをも具体的に提案するのは大切だと思うし、我々を含めて将来の皆さんがそれをアグリーできるまで持っていきたいわけだが、なかなか重い足取りかなと思う。自身は、極端だがFE の枠組みでもうまくいかないだろうという感覚、Co-Design とか Co-Production も本当に大きな成果をあげられるのかという根本的な疑問を持っている。この枠組みでステークホルダーをほうり込んでちゃんと皆さんに良い社会、サステナブルな社会を作れるようなインセンティブをFE の枠組みは付与できているのだろうかと思っている。

→むしろ、FE の理念は今後変わっていてもいいと思う。それほど完全な形で決まっているわけではない。例えば（先生がいらしてられる）Future Design という視点でいい形があり得るのか、むしろポジティブなコメントがあればお願いしたい。

→ポジティブな側面としては、「仮想将来世代」ということで、将来の世代の視点を現代に取り込む手法を開発していこうということで、自身は“Design”という枠組みの中で考えようとしている。将来のことはわからないのに、どうやってその視点を現代に取り込んでいくのかいわれているが、その将来性を持っているにもかかわらず発言できずにいる。それが現在の研究における自身なりの発見ではある。

→FE の議論を通じて感じるのは、未来志向というか進取の気性のある人たちが多く集まっていること。それはよいことだが、それを実践していくためには今現在どうなっているのか、足元はどうなのかということをしつかり押さえないと、空回りになったり無駄なことをやってしまうことになる。それが典型的に表れているのが、環境教育、ESD とFE の関係。環境教育に色々問題があったのは確かだが、それが始まってからの長期の蓄積がある。弱い部分を補っていけば、今のリソースを最大限に使える。しかし、それをきちんとやらないで、何か新しい方向にだけ目が向

いていると、今までやってきたこととこれからやりたいことがつながらない。そこで ESD は、文科省と環境省が一緒になり、アクションプログラムを作成してやっていると思う。日学も FE 委員会もそれをサポートする姿勢がもっとあってよい。新しいことだけに目が向いているなら、まさに「学者による学者のための議論」に終始し、トランスディシプリナリが概念化されたレベルの議論で終わってしまう恐れがある。

【ESD の評価】

・ESD も（ユネスコの課題となって）もう 10 年くらい経った。ESD はどういう評価なのか。今後 ESD は重要なわけだが、それと先生がおっしゃったように、Future Design や Future Generations を考えたら、それは非常に重要な側面。いわゆる「ステークホルダー」といった時に、学校の人たちは重要なステークホルダーだ。

→昨日まで韓国に行っていたが、韓国の国立教育大学全体を束ねる位置にあるのが韓国国立教育大学。そこの学長と意気投合した。彼は 3 つのプランを提案したが、そのうちのひとつは「科学未来館」のようなものを自分の大学に作りたいというものだった。現在非常に大きな図書館を造っていて、今までの図書館をその科学館にあてたいとのことだった。彼の任期はあと 3 年ほどだが、任期中にそれをやってしまいたいとのことだった。FE に非常に関心を持っていた。

→自身の資料で「科学コミュニケーションのリソース」と書いたのは、科学コミュニケーターももちろんだし、未来科学館を中心とする国内外の科学館ネットワークも使えると思う。あと、科学館の科学コミュニケーターとして思ったのは、先ほど「教育」とおっしゃったが、自身のイメージでは先生は教える人、生徒は学ぶ人。だが本来は、皆が学ぶことがこれからの教育のイメージになったらよい。「生涯学習」というか、大人も新たな学びがあるはず。未来世代の視点を取り入れた「大人の学び」、「未来の地球学講座」のようなものはいいと思う。

→この点について、優先する 10 のテーマ、これに問題解決の視点だけでなく、将来志向の視点を入れることについてはどうか。

→2 月 4 日のシンポジウムでもそういう質問が予定されている。現在、将来における重要性がどう違うのかが議論される。ひとつの情報だが、10 の優先テーマを出した後に、これをどう使っているかという形での問い合わせを色々なところからいただいている。そのひとつがスーパーサイエンス・スクールのグループで、既に 200 名程度高校生が集まって、10 のテーマのうち「気候変動」と「環境と文化」で議論してもらった。そこで議論した内容と我々専門家が議論した内容では、少し違う。高校生というひとつのステークホルダーと我々とは議論が違うということが重要で、それがどのような形で出てくるか。もうひとつは金融機関からもこのテーマについて問い合わせがあった。様々なステークホルダーが各々違う視点で見ている。それを次の形で次のステップに持っていく。そのテーマを次にどのように使っていくかという議論する。

【日本からの情報発信】

・FE の（英語の）ウェブサイトにはどのように関わっているのか。

→投稿が主である。

→もう少し本格的にデザインとか、日本初の少しイノベーティブな、リアルタイムで発信した方がいいようなエキサイティングな新しい試みがあるということ、FE の全体のウェブで発信していくことが日本にとって重要なのでは。

→もし可能であれば、研究者の方が自ら発信していく方がコミュニケーションを通すよりもいいのでは。

→コラムのようなものを研究者が書いて、それを FE 全体のグローバルな情報として発信する。例えば、月に 1 回日本からコラムが発信されているということであれば、そんなに難しいことではないと思う。高校生のレベルでの優先課題とか、具体的に 1 頁程度で書いて少し整えて、毎月それが発信されれば随分違うだろう。

→それについては、実は地球研と合同ハブで話し合いをした。日本の活動を紹介するページを作ったらよいのではといった提案があったので、ストラクチャーの変更を進めているところなので、是非提案していきたいと思う。あと、今おっしゃられたことをやるために作られたのが、オープンネットワーク。それが誰かがコミュニケーション担当として介在するのではなく、やっている人が自分から発信してくださいというコンセプトの下に作られたウェブ上のコミュニティ。研

究者がそれを使っていただくことは重要で、同時にそれにメインのホームページに「日本」を出すことはいいと思う。日本はアジアの国々を背負う立場でもあるので。

【FEとソサイエティ5.0】

・江守幹事の資料で、関与委員会が日本の国内ではFEをオペレーショナルにまわすには重要と思う。ソサイエティ5.0は、内閣府と政府全体でつくこいわれていて、そこをつくして実施するということのようなことは議論しようとしているのか、あるいはかなり新しい概念なのか。

→まだしていない。そういえばそういうものがあつたなという感じだった。

→第5期科学技術計画にあるいくつかの大きなテーマの中に「地球規模の環境問題」があつて、その中にFEがテーマとして出てくる。行数としては多くはないが、(FEが)キーワードとしてそこに入っている。従って、科学技術計画の中にFEは居続けられている。しかし、ソサイエティ5.0は、産業界の意見も入れてできた概念で、工業化、情報化社会の次にそれがくるという位置づけになっている。例えば、IOTのようなシステムが社会に出てくるとか、そういう概念につながっている。その意味では、FEとは向いている方向はやや異なるかもしれない。ただ(FEは)、基礎的な研究分野の整理の中の重要分野のひとつではある。

→ソサイエティ5.0はここに結び付かないといけないような気がする。AIを使ってどうしたというのわかるのだが、そのフィロソフィーのようなものがイメージできるように、FEをとらえた方がいいのでは。

→FEの中に実際のビジネスや社会の活力を高めることは入っていないはず。社会の活力を高めるところにIoTが入っている、そこでリンクするはず。学術の方からFEの議論を始め、そこにビジネス思考が入ってくると、いきなりソサイエティ5.0の話が出てきて、それを考えざるを得なくなってくる(のどうまくつながりがとれない)。そういう意味ではエンゲージメント委員会の中でそういった産業界の意向が強くなってくると、ソサイエティ5.0をもう少しFE的に解釈して考えてどうあるべきかという議論になってくる。

→おっしゃる通りだと思うが、今は距離があるところをもっと戦略的に(考えるべきと思う)。IoTはビジネスや産業の人たちのことであり、他は関係ないということではない。社会の高度情報化が進み、IoTとかAIの時代になっていく、そう変化していくものであるという中では、つながっているというか、議論の前提として一緒に考えていかなくてはならない問題。おそらく技術の進化と社会の変化が相互作用しながら進んでいくことを頭に描きながら、課題の解決を議論しなければならない。その時にAIで雇用が奪われるとか問題も起こるかもしれないが、それをうまく使ってポジティブな世界を思い描いていくという希望のある方向に議論していった方がいいのではないか。

【情報発信の方法】

・ハブの重要な役割は情報発信と情報収集。(昨日まで会議に参加していた)韓国でひとつ思ったのだが、両国で関連した議論が行われており、学術会議からは「提言」、「学術の動向」などで情報が発信されているが、ほとんどが日本語での情報のため、国内に留まっている。日学には翻訳するためのお金も余裕もないと思うので、お金を持っている団体や大学に協力してもらって翻訳して発信できないか。日本語だと海外で活かされない。

→それは重要だが、FEは基本にお金のことでいうとリソースは足りない。インカインドで、例えば日本語で書いた日学の提言で、例えば最初のエッセンス(概要)だけでも英語で載せるとか、そういった努力はしていかななくてはならない。日本からあるいはアジアからの発信は今後重要になってくると思う。FEは良くも悪くも欧州のコミュニティが考えた概念で、アジアには今のFEにはとても解決できない問題がある。そこを日本のグローバルハブから世界に発信していく、それは当然英語での発信だが、そこは協力して進めるべきだ。今度辞任されるSilvastava FE国際事務局長が日本にきて、日本で色々な人と議論して「日本はすごく進んでいる」と。彼にはグローバルハブにはない地域の視点、文化の視点があつて、宗教や芸術というこれまでのFEにはあまりなかった視点を入れようとしている。そういう意味でも、日本やアジアからの発信をしなくてはならないのではないかなと思う。

・今年度の委員会もこれで最後となる。来年度も4月か5月に第12回を開催する。この3月にはカ

ナダで国際的なエンゲージ委員会が開催されるのでその報告などをしたい。来年度も引き続きよろしくをお願いします。

(閉会)